

元気を鼓舞する実践を

上うえ 廣ひろ 榮えい 治じ

晴れわたった秋空を渡る風に乗って、どこからかブラスバンドの演奏が聴こえてきます。運動会の音楽でしょうか。陽気で賑やかで浮き立つような気分させられます。

ものの本によれば、日本人が管楽器による西洋音楽に興味を持った最初は、幕末、薩摩藩が鹿児島湾で英国艦隊と戦った際、敵の軍艦上で士気を鼓舞する音楽が吹奏されたときだそうです。沿岸の砲台から大砲を発射していた薩摩藩士たちは、敵が奏するこの音楽に感動したらしく、その六年後の明治二年には、藩士三十余名を横浜の英国海軍軍隊長のもとに派遣して、軍楽の伝習に当たらせています。

私たちがブラスバンドの演奏を聴いて、なんだか浮き立つような気分になってしまうのも、そもそもこの種の音楽が人の元気や勇気をかき立てるためのものであったからに違いありません。

音楽に限らず、何事についても言えそうですが、人の心を揺さぶるものには、吹奏楽のように人の元気を鼓舞するものと、弦楽曲のようにセンチメンタルな気分を誘うものとの二つがあるように思います。

